

中村哲氏のアフガン現地報告

アフガニスタンの人人を支援するペシャワール会現地代表の中村哲医師による現地報告会が三日午後二時から、福岡市の西日本新聞会館ホールでおこなわれた。この報告会は、ペシャワール会の総会をかねておこなわれたが、会員でない人にも公開され、約五〇〇人が参加した。中村氏はスライドをうつしながら話をすすめ、ペシャワール会の一八年におよぶ活動をふりかえり、またこの一年間はひじょうに激動したと現地の実情を報告し、報告のあと二時間あまり質問をうけて具体的にこたえた。中村氏の報告と質疑応答の全体が、アフガニスタン人民の実情を知ろうとて貴重なものだが、ここではそのなかから、「九・一一事件」を口実としたアメリカの空爆やタリバン政府の転覆、「カブール解放」などにかんして現地の実情を語った部分を紹介する。

無政府状態のカブール

米軍は何をもたらしたのか

「建設」「復興」とは名ばかり
いまアフガニスタンについて、報道がぎざぎざと出ています。あたかもなにか建設がすすんでいるかのよう、あかぬけい姿ばかりが伝えられていますが、現実はいまはひどく悪くなっています。はるかに去年よりも悪くなっています。いまの政



アフガニスタンの現地報告をおこなう中村哲氏 (13日、福岡市での報告会)

府も、いつまでもつかわかないという状態のなかにあります。報道は少なくなりましたが、軍事行動は日に日に拡大しているのが現実です。そして誤爆はある、誤爆とあいつか、すい前からの爆撃もあつて、谷間にちがった撃がついてくるのです。一つ谷がいくつ、かたまたそれから地上戦がすすみます。拡大しています。米英の軍隊がひきあげれば、カブールは一週間ともたないだろうといわれています。報道を見て奇異に思うのは、アフガニスタンのような山の国では、きのう政権がたおれて、きょうカルザイ政府というのができて、一年半後には総選挙がやられるというが、そうかんたんにはいかないだろう、といふことなんです。わたしたちが診療活動にゆく場合も、馬でいったり

した。現在おこなわれているカブールの復興支援というものは、そのときの二の舞である、といふことがはっきりいえます。

治安よかったタリバン時代

国連は二年前の五月に、大干ばつがアフガニスタン・中央アジアをおそっており、約六〇〇万人が被災していること、もっとも激

烈な被害をうけているのはアフガニスタンで、人口の半分にあたる二二〇〇万人が被災し、四〇〇万人が飢餓線上にあり、一〇〇万人が餓死線上にある、と発表しました。

わたしたちのまわりでも、うきうきと村が消えていく、それまでゆたかな水の谷といわれていたところが乾燥した砂漠地帯になってしまふ。アフガニスタン

の住民の九割が農民であり、かれらが壊滅するといふことはアフガニスタンが壊滅するといふこととす。

現地では、こんな悲惨な状況、ひどいことが世界中の話題にならないはずなからうと話になりましたが、ほとんど世界的な反響はつかなかった。それがタリバン政権のせいだといふ言

い訳は、せつたいに通用しません。なぜならタリバン政権の時代がアフガニスタンがもつても治安のいい時代でした。だから国連がその気になれば、あるいは外国の政府開発援助(ODA)がその気になれば、救援は自由自在にやれた時代でした。

ところがほとんど救援はなかったのです。それどころか、やってきたのは国連制裁でした。昨年一月に国連制裁が発動されたとき

には、食糧まで制裁しようとした。その後も援助できる余地はいつでもあった、ところがそれはやられずに、テロ事件、直後から突然空爆

とした。飢饉で二〇〇万人が死ぬであろうといわれていたときに、食糧を制限しようとした。

99%の人々が反米感情もつ

その後も援助できる余地はいつでもあった、ところがそれはやられずに、テロ事件、直後から突然空爆



米軍の爆撃で破壊されたカブール市内の国連関連施設(昨年10月)

わたしたちはべつにタリバン支持というわけではありません。ちなみにわたしはキリスト教徒です。しかしタリバン政権下ではまともな食糧支援ができませんでした。協力してあげた兵隊さんに、ありがたうといつて小麦粉をわずかに一袋わたすだけで、ありがたういいますと感謝してうけとってくれる、それくらい秩序がたもたれていた。

ところが、約一四〇〇人はこんだつとで、カブールが陥落して、タリバンは一夜にして消えました。消えたというのが正確で、数千人は戦死させられたり、キューバにつれていかれたりしましたが、ほとんどは消えてしまった。消えたといふことは、いつあられるかわからない、といふことです。

そのあと北部同盟軍が「解放軍」のようにむかえられましたが、世界中があれで完全にだまされた。まるで「解放軍」がやってきてタリバンががぶせた女性のフルカもなくなる、アフガニスタンに自由とデモクラシーがおとすれるという、錯覚に世界中がかられたわけなんです。

実際にはなにかおきたか、すくなくともわれわれの仕事になにかおきたか、という、無政府状態で食

